

## 第 11 回京都建築賞 藤井厚二賞部門テーマ意見交換会

日時 令和 4 年 11 月 30 日

出席 審査委員（50 音順） 平塚桂、村越怜

顕彰制度特別委員会 黒木、篁、米沢、藤原、宇治川

**藤原：**本日は藤井厚二賞部門の委員長の長坂さんが不在ではありますが、来年の京都建築賞の藤井厚二賞部門のテーマを決めさせていただきたいということで宜しくお願い致します。村越さんが藤井厚二賞を受賞されたときのテーマは「切実につくる」というテーマでしたがどういった感想でしたか？

**村越：**応募書類をつくるにあたって、切実かどうかみたいなことが審査されるのかということとは考えはしたんですけど、まあ、そこに寄せるのもなんか難しいというか、つくったものをプレゼンテーションしたら、切実だということはわかるのではないかと。「切実」っていう言葉だと、コストの話とかは関係する面はあるのかなと思ってはいるんですけど、寄せようとしてつくったということは特にはなかったです。



**平塚：**良いかわるいはは抜きにしてちょっと思ったのが、一つ「継承」とかはどうかなって思っています。新建築の住宅特集の今売っている号が確か「住宅遺産の継承」だったと思うんですが、その中に藤井厚二設計の喜多邸というのがあるって、藤井厚二の設計した建物そのものが継承されるっていうパターンがあってそういったものが応募されてくる可能性あるなって思ったんですよ。それでちょっとふとなんか思ったっていうのはありますね。概念としての藤井厚二じゃなくて、本当に実態が現れるそれそのものと対峙するっていうのも一つあり得るんじゃないかっていう。

**藤原：**確かその号はいろんな建築家の設計した建物をリノベーションした建物の特集だったんですけど、確かに時代的に一つのサイクルとしてそういう時期にもだんだん来てるかなっていう感じではありますよね。

平塚：藤井厚二っていう人は、多分、和風の建築の良さとかを継承しつつ、ヨーロッパとかで学んだ新しい考え方とか、環境工学的な考え方とか、座の生活様式とかを取り入れて、新しいものを生み出した人ではあるんだろうなっていう。

村越：どういうコンテキストを継承してるか、とかっていうところなんですかね。

平塚：そこにセンスが問われるような気がします。

藤原：「継承」というのは京都で応募するっていう話においても、門戸としては広い気はしますよね。

平塚：そう京都って本当に継承しなきゃいけないもの多くて、その新建築住宅特集の特集も、後半に町家と民家の継承のコーナーがあって、それもなんか半分以上が京都の事例だった気がするんですよね。物語ってるなど。継承まみれの地域であるということです。

村越：町家とかっていうのは、結構こう直接的な継承というか、もの自体を受け継ぐみたいなのところがありますが、藤井厚二自体がやってた継承っていうのはその実際のものではなくて、無形の文化というか、そういうものを継承していくということなんですね。

前回の転換っていうのは、ものの見方を変えるとかがっていう感じですよ。

平塚：だから近いベクトルだけでも逆でもあるみたいなことですよ。

村越：ちょっと違う話にはなるんですが、テーマはこうかな、みたいなことは考えてはこなかったんですけど、最近見たものとかの話をしたらなんか広げてもらえるかなとか思って、最近、菊竹清訓の館林市庁舎を見に行ったら、それは1963年竣工の建物で、館林の市庁舎自体は今も別の方に移ってるんですけど、館林市民センターとして使われていて、そこでコルビュジェ建築と絡めた展示をその5階のフロアを借りて展示を5日間ぐらいやるっていうもので、それに行ってきたんです。その展示の主催をしてる人が、多分40歳ぐらいだと思うんですけど、建築設計とかをやってる人ではない地元の人3人でやって、ちっちゃい頃、そこで遊んでたっていうことで、その建物にすごい愛着あるということだったんです。保存したいので取り壊さないでくれっていうことを、役場とかに言っても、結局は取り壊されちゃうっていうパターンが多くて、その人たちはだったら自分たちが使って人を集めるとか、あとは将来的には全部のフロアを自分たちで借りちゃえばいいんじゃないかみたいなことを考えてるみたいで、で、1年前に同じように展示をやったんですけど、その時は500人ぐらい来てくれて、今回やった時には、話題がもっと広がって、市長とかも来てくれるようになって、そうなるんだんだんこう役場の人もかも声を掛けてくれるようになったって言って、来年も、1フロア借りてなんかやってみないかみたいな話とかに繋がっていったらしくて。

そんな保存の仕方あんまり考えたことなかったし、地元の人だからこそできるっていう、上からこう来た保存の仕方じゃなくて、すごくいいなって思ったんですよね。継承と直接的に繋がるかまではあれなんです。

平塚：使うことで保存がなされる。物理的な手を入れることに限らない。

藤原：確かにそういう取り組みはなかなか面白いものでもありますね。

村越：展示のルートがエレベーターで上がって、エレベーターで帰ってくださってというルートだったんですけど、階段から降りてもいいんですかって聞いたら、もう全然降りてください、僕と一緒にいたら裏の方まで入れますみたいな。守衛室の方とか普通、通らないような通路とか通って行って。本当にそこが好きで使ってる人っていうのが、なんか、そういうことを考えるっていうのが面白いなど。

藤原：そういったこと考えると建築賞ではありますけれども、実際の建物じゃないものも応募できるような形になるとなにか、それもまた面白いですね。

平塚：藤井厚二は好感度が高い建築家というか……。

村越：藤井厚二は嫌いっていう人あまりいないと思いますよね。

平塚：で、結構解釈の余地みたいなものがあって、いろんな視点で考えられる建築家の方でもあるので、ゆるく応募できるような気がします。

黒木：今、環境とかSDGsとか言ってるから、割と話題になったりはしてますよね。

平塚：時代性みたいなものもあるかもしれないですね。

村越：一つのことではないですけど、結構似たようなことをやり続けたというか……。ころころテーマを変えてつくるような人ではなかったかな、という気はしています。僕が建築を見るときは、設計者がどういうことを射程に入れてつくっているかというか、どれぐらい深くまで取り組む気度でつくってるんだろうかっていうことは建築を評価する時見ちゃうと思います。

藤原：ちょっと戻ってテーマとして一個「継承」っていうのは平塚さんから出てますけど、どんな感じでしょうか？

平塚：応募しにくかったりする要素があったら変えた方がいいかなあとは思います。

村越：しにくいパターンとしてなにかありますか。

藤原：言葉を変えるとかでもいいんですけどね。継承っていう意味としては一緒でも。

平塚：「つぐ」とか、「つなぐ」とか……。より広がるかもしれないですね。



**村越**：継承っていうと、何かこう大きいものや重いものがあるって、それを受け継いでないといけないんだみたいな風に思うことがあります。

**平塚**：確かに重い言葉ですよね。そうすると、なんか「つながる」とかの方が楽に応募できますかね。

**村越**：継承と繋ぐだと、なんとなくこう受けるイメージは違うなと思っていて、「つなぐ」っていうとなんか現代的な横の繋がりみたいなのが入ってくるかなという感じで、継承だと時間軸的なものをやっぱりイメージしちゃうかなというところがあります。

**平塚**：なんか時間は大事な気がしますよね。（時間の意味は）込めた方が良さそうな気はしました。先ほどおっしゃっていた藤井厚二の同じことをやっていく感じとかそうですし、京都っていう場所性もありますし。むしろ込めた方がいいんじゃないかと。「時間」とかでも良いんじゃないかと思えますけど、ただ建築との繋がりが弱い言葉だから。

**村越**：メディアアートとかそういうのだと、時間とかが作りやすそうですけど。

**平塚**：漢字で「つぐ」「つなぐ」とかは時間っぽくなりますよね。

**黒木**：未来へつながっていくような。確かにいいかもしれませんね。藤井厚二さんの意思をつないでいくっていうような。

**平塚**：そうですね。漢字にするのはいいですね。

**藤原**：今まで出た話の流れとして、継承とか時間とか、そういうものを内包した意味で「つぐ」「つなぐ」っていうのを「嗣ぐ」の漢字だと、それも内包される感じにはなるので、良いかもしれないですね。では今回のテーマは「嗣ぐ」ということでお願いします。